平成 28 年度　大阪府中学生チャレンジテスト(3 年生)
結果と分析（東大阪市）

平成 28 年 6 月 23 日に実施された「大阪府中学生チャレンジテスト（3 年生)」について、東大阪市の結果及び分析を公表します。

●調査結果について●

本調査で得られる結果は学力の特定の一部であることや、平均正答率のみでは生徒の学力については測ることができないことを踏まえ、本調査から得られたデータをもとに学校・家庭・地域が学力に関する課題を共有し、さらなる連携を深め、生徒の学力向上に取り組むことを目的として分析を行った。

●調査目的●　（大阪府教育委員会作成の実施要領より）

①大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒の課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。

②市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組みを通じて、学力向上のための PDCA サイクルを確立する。

③学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。

④生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

●調査概要●

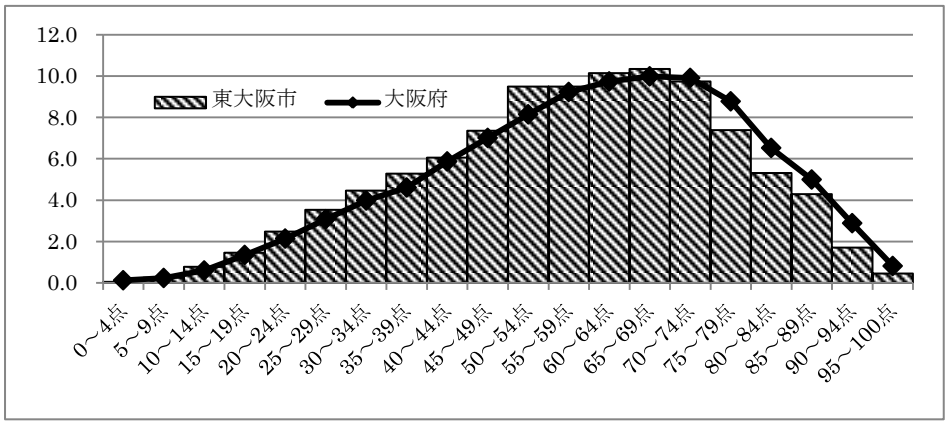
実　施　日	平成２８年６月２３日（木）
実施対象学年	中学校３年生
実　施　教　科	国語・数学・英語・理科・社会
調査実施生徒数	国語：3995 人　数学：4008 人　英語：4015 人 理科：4026 人　社会：4016 人

第３学年　　国語

■平均得点

57.6 点（東大阪市）　　59.6 点（大阪府）

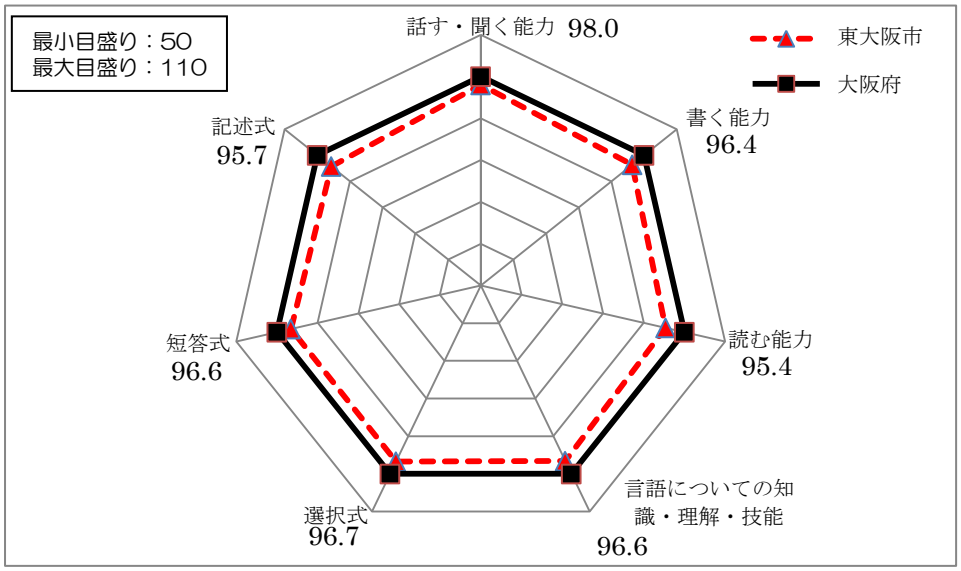
■得点別分布の割合



・65～69 点をピークとする右寄りの山型となっている。

・府の分布と比較して、75 点以上の生徒数の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート（大阪府を 100 とした時の東大阪市の得点率）



・「話す・聞く能力」について、大阪府との開きが最も小さい。

・「読む能力」において、大阪府との差がやや大きい。

・「記述式」の設問において、低い得点率となっている。

■特徴的な傾向と対策

・「文脈に即して漢字を正しく読む」設問は、大阪府の平均正答率を上回っている。一方で「文脈に即して漢字を正しく書く」設問は、大阪府の平均正答率を下回っていることから、読むことはできても書くことができないことがうかがえる。家庭学習や短い期間で定着の様子を見取る工夫などにより、確実な習得を図る必要がある。

・「本文の表現上の特色としてあてはまらないものを選ぶ」設問は、全設問中（漢字を除く）2 番目に大阪府との平均正答率の差が大きい（東大阪市 45.3%　大阪府 49.2%）。表現の工夫について自分の考えをもつことに課題がある。読書活動の充実を図る等、多様な表現の文章を読む活動を通して、表現の特徴をとらえる力を身につける必要がある。

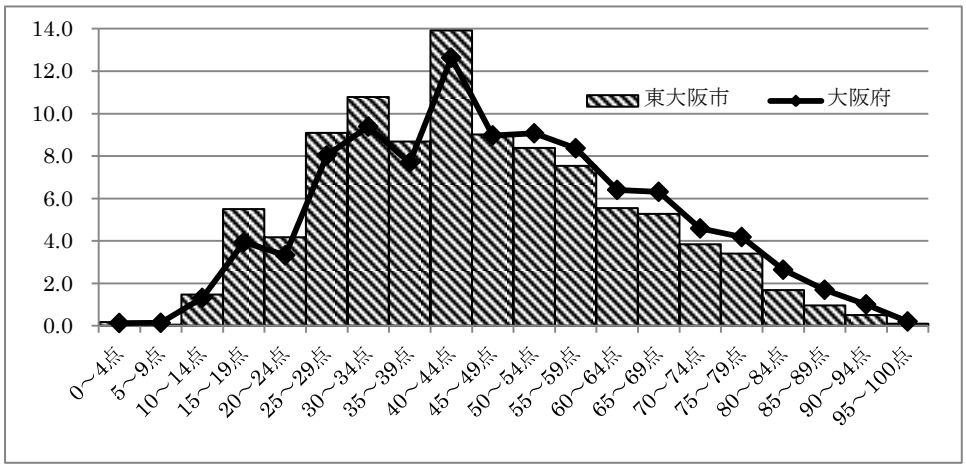
・「鑑賞した絵について，自分の考えを条件にしたがって書く」設問は、全設問中（漢字を除く）3 番目に大阪府との開きが大きく（東大阪市 33.2%　大阪府 36.9%）、無解答率も高くなっている（東大阪市 48.6% 大阪府 45.4%）。自分の考えを根拠を明確にして書くことに課題があり、より一層の「書くこと」の指導の充実が求められる。

第３学年　　数学

■平均得点

45.0 点（東大阪市）　　48.1 点（大阪府）

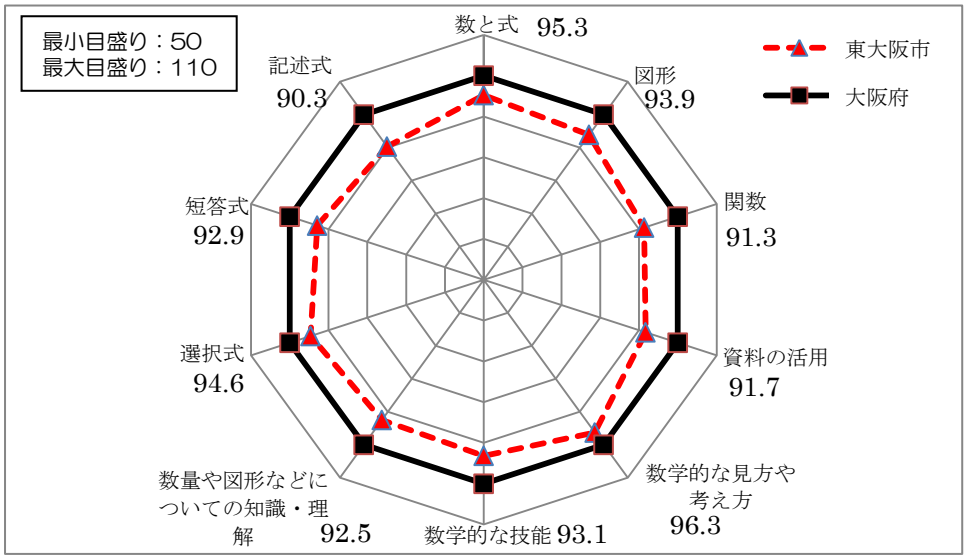
■得点別分布の割合



・40～44 点が突出する山型の分布となっている。

・府の分布と比較して、50 点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート（大阪府を 100 とした時の東大阪市の得点率）



・すべての観点等において、大阪府との開きが見られる。

・領域別では「数と式」がもっとも府との差が小さく、「関数」での差が大きい。

・設問形式別では「記述式」の設問において府との差が大きい。

■特徴的な傾向と対策

・「y＝－3x－4 と平行で点（1，2）を通る直線の式を求める」設問は、全設問中で、大阪府との開きが最も大きい（東大阪市 28.0%　大阪府 36.5%）。また、無解答率も高い（東大阪市 37.6%　大阪府 32.1%）。一次関数の関係を式で表すことができるかどうかを問う設問であり、一次関数の基本的な設問でもあるので、授業での反復による定着や、家庭学習の内容を工夫する必要がある。

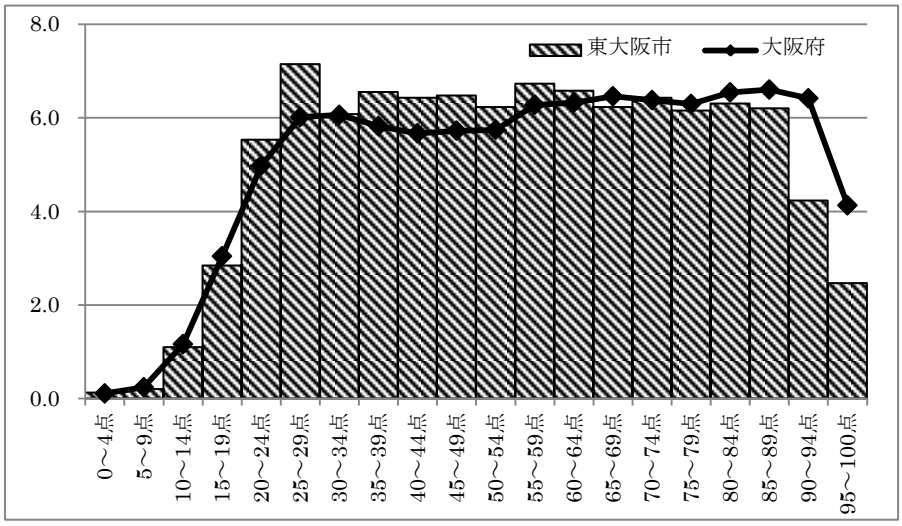
・「$\frac{5x+3}{4}=\frac{4x+5}{3}$を分母はらった一元一次方程式にしたものを選ぶ」設問は、全設問中 2 番目に大阪府との開きが大きい（東大阪市 62.8%　大阪府 69.5%）。等式の性質を理解しているかどうかを問う設問であり、さまざまな方程式を解く上で必要である。確実な定着を図る工夫がより一層求められる。

第３学年　　英語

■平均得点

55.4 点（東大阪市）　　57.9 点（大阪府）

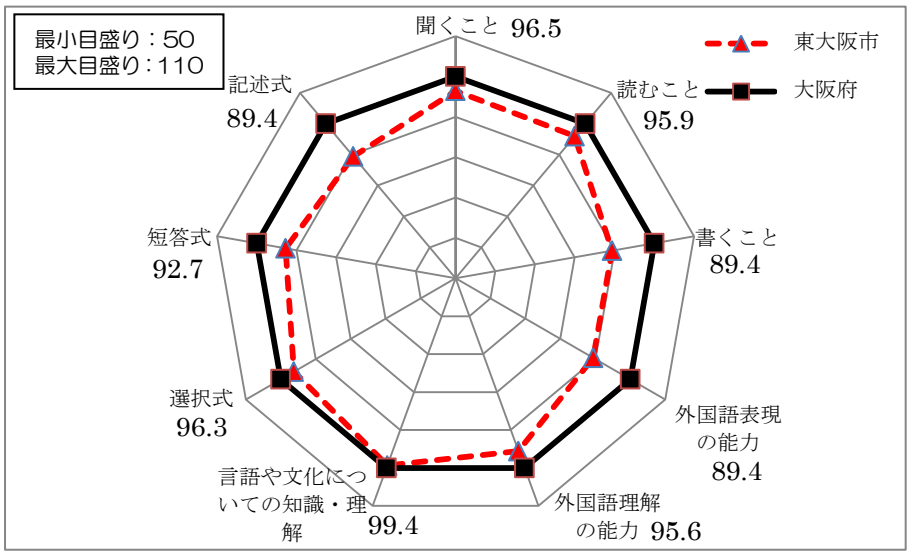
■得点別分布の割合



・20～89 点を上底とする台形型となっている。

・府の分布と比較して、90 点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート（大阪府を 100 とした時の東大阪市の得点率）



・「書くこと」「記述式設問」において、大阪府との開きが見られる。

・「外国語表現の能力」は、低い得点率となっている。

・「言語や文化についての知識･理解」は、比較的高い得点率となっている。

■特徴的な傾向と対策

・「短い会話を聞き、応答文として適切なものを選択する」設問の一つに大阪府との平均正答率の差が最も大きいものがある（東大阪市 42.7%　大阪府 48.0%）。単語や文を聞き取る指導を行うだけでなく、場面の様子や会話の流れを捉えた上でリスニング問題に取り組むといった指導を行う必要がある。

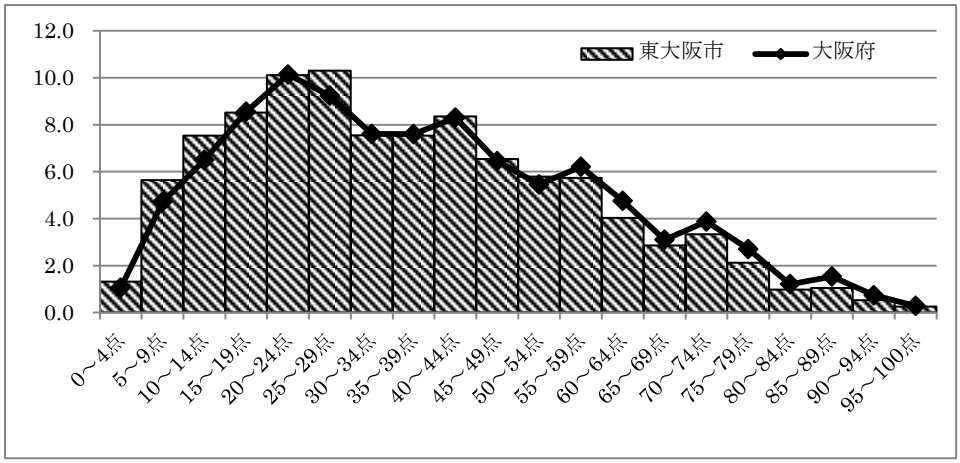
・設問によって差があるが、短答式及び記述式の無解答率（東大阪市 9.8%～45.3%　大阪府 9.3%～42.2%）が高い。外国語表現の能力とともに、英語を使ってコミュニケーションすることへの関心・意欲の低さが無回答率を上げていると考えられる。ＡＬＴや英語科教員との英語を使ったコミュニケーション活動の場面設定を工夫し、子どもたちが積極的に英語を使ってみようとする意欲の向上を図りたい。

第３学年　　理科

■平均得点

36.7 点（東大阪市）　　38.6 点（大阪府）

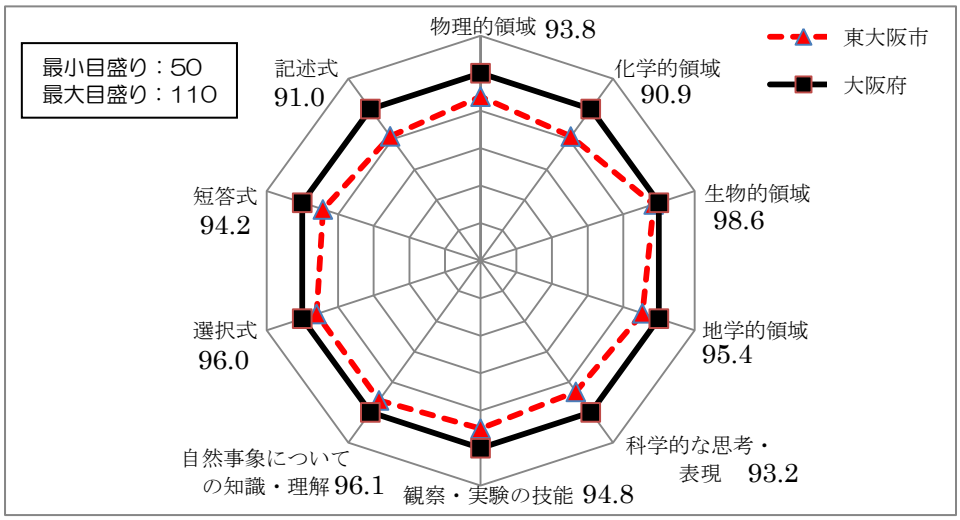
■得点別分布の割合



・25～29 点をピークとする左よりの山型となっている。

・府の分布とほぼ同じ状態である。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート（大阪府を 100 とした時の東大阪市の得点率）



・「物理的領域」「化学的領域」「生物的領域」「地学的領域」を比較すると、「化学的領域」での得点率が、大阪府との比較で低い値となっている。

・観点別では、「科学的な思考・表現」において、大阪府との比較で最も差が大きい。

■特徴的な傾向と対策

・「化学変化の前後で物質の質量の総和が等しいことを示す法則名を答える」設問は、全設問中で、大阪府との差が最も大きい（東大阪市 42.8%　大阪府 50.3%）。質量保存の法則について理解しているかどうかを問う設問であり、化学の領域の基礎となる法則である。基礎基本の確実な定着を図る工夫がより一層求められる。

・「緊急地震速報が発表されてから大きな揺れが来るまでの時間を答える」設問は、全設問中で最も正答率が低い（東大阪市 13.2%　大阪府 16.0%）。緊急地震速報と主要動について考えることができるかどうかを問う設問であり、地震のメカニズムについての知識や理解が求められる。

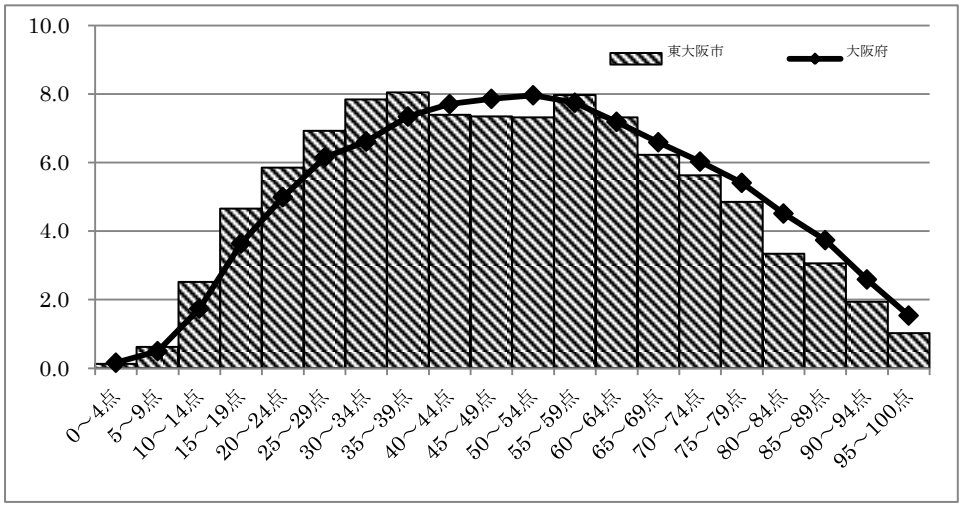
・アンケートの「理科の授業の内容はよく分かる。」という質問項目に「あてはまる」及び「どちらかといえば、あてはまる」と回答した生徒の割合は大阪府を上回っている（東大阪市 73.8%　大阪府 72.8%）。しかしながら、得点率は府の平均を下回っており、授業中に理解したことをしっかりと定着させる工夫が必要である。

第３学年　　社会

■平均得点

49.4 点（東大阪市）　　52.2 点（大阪府）

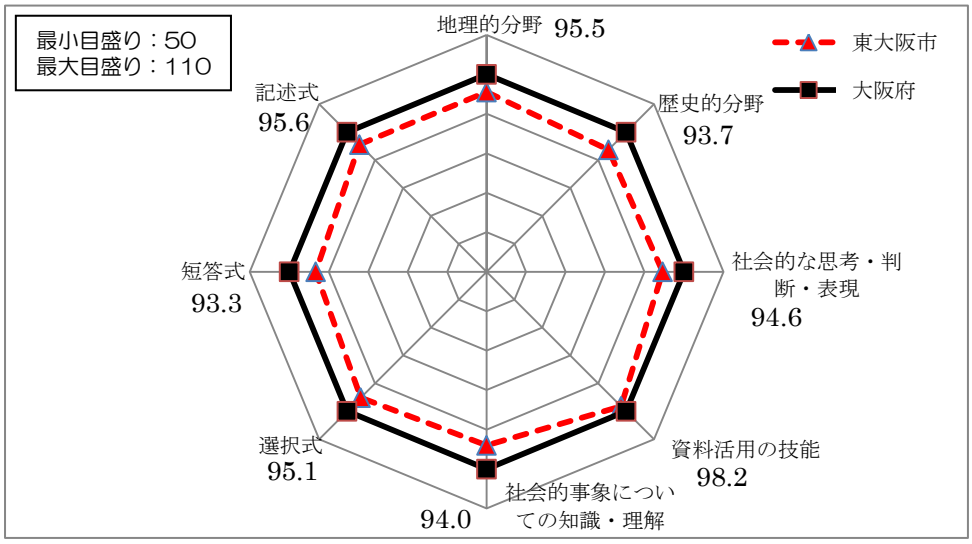
■得点別分布の割合



・35～39 点と 55～59 点をピークとするふたこぶの山型となっている。

・府の分布と比較して、65 点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート（大阪府を 100 とした時の東大阪市の得点率）



・すべての観点等において、大阪府と比較すると、やや差が見られる。

・「地理的分野」より「歴史的分野」の得点率が低い。

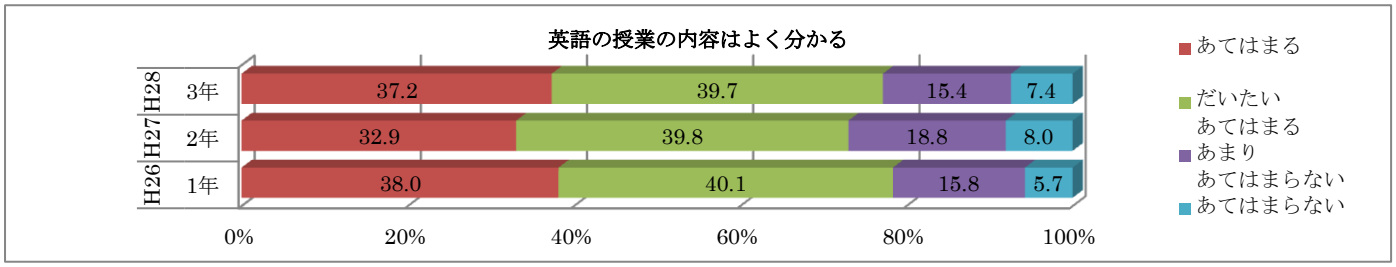
■特徴的な傾向と対策

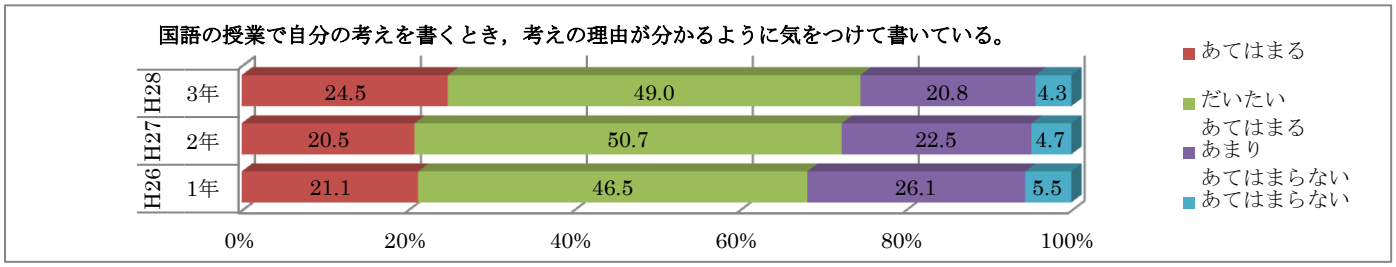
・「近世に関する三つのことがらのうちで誤っているものを選び、正しい語を書く」設問では、全設問の中で最も正答率が低い（東大阪市 11.7%　大阪府 14.5%）。元禄文化・古事記伝・日米和親条約について理解しているかどうかを問う設問であり、それぞれの出来事の背景にある時代の流れや中心人物等を正確に読みとる力が求められる。

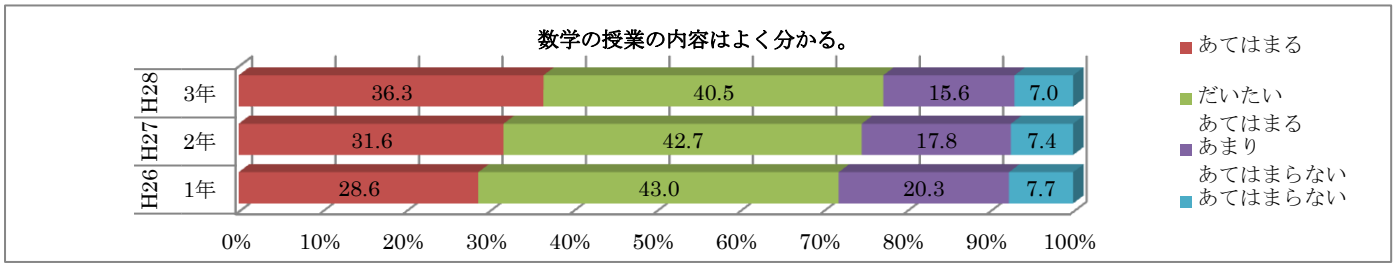
・「フランス革命より前に起こった世界史におけるできごとを選ぶ」設問では、大阪府との平均正答率の差が最も大きい（東大阪市 23.4%　大阪府 30.9%）。フランス革命前後のできごとについて考えることができるかどうか問う設問であり、欧米諸国の近代化の流れを図表やチャート等にまとめ、歴史的事象の原因・過程と結果を整理する活動をより一層充実させたい。

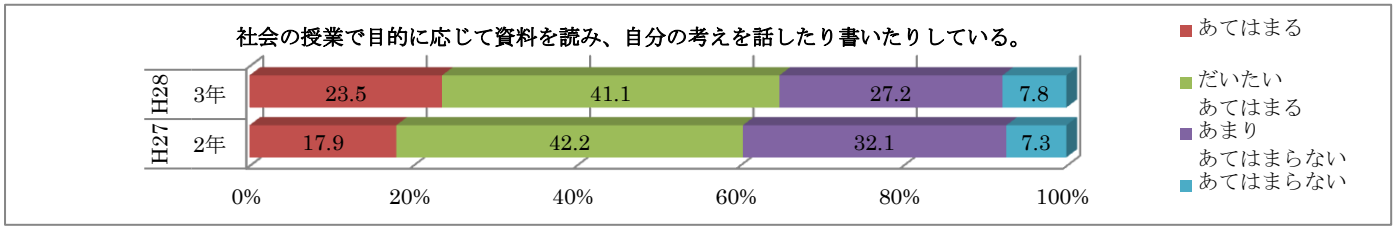
アンケート結果（同一集団の１年生時・２年生時からの変化）

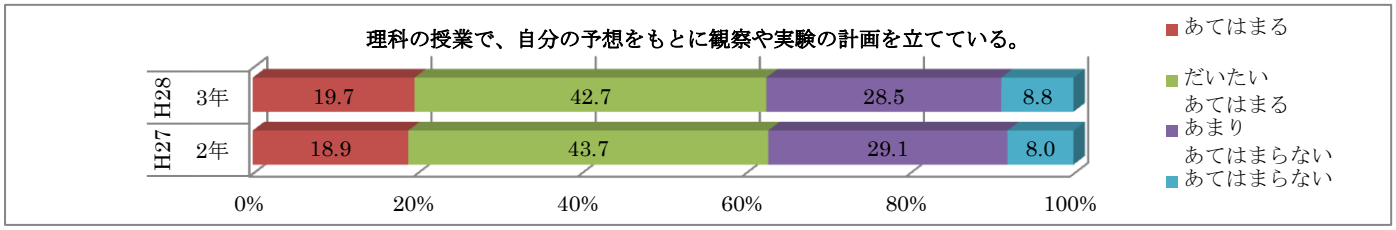
第３学年











■特徴的な傾向と対策

・「国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている」と回答した生徒の割合は、学年が上がるごとに増加している。

・「英語の授業の内容はよく分かる」と回答した生徒の割合は２年生時には大きく減少したが、３年生になって増加している。また、「数学の授業の内容はよく分かる」と回答した生徒の割合は学年が上がるごとに増加している。しかしながら、「あてはまらない」と回答した生徒は、減少しつつも一定割合おり、習熟度別や少人数の指導を活用しながらより一層の授業改善が求められる。